

あそぶ、まなぶ、いきる。

山と溪谷社

An impress Group Company

各 位

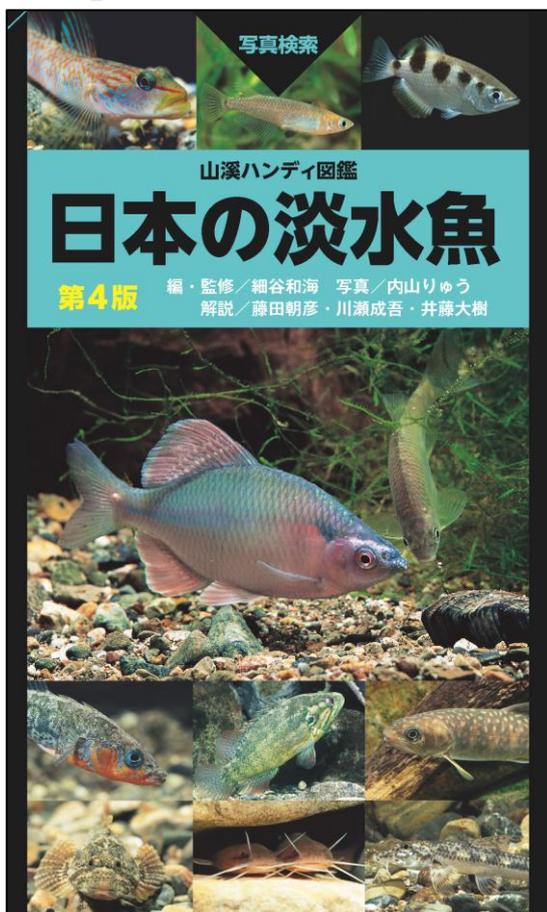
2025年7月18日

株式会社 山と溪谷社

<https://www.yamakei.co.jp/>

日本の淡水魚図鑑の決定版『山溪ハンディ図鑑 日本の淡水魚』が第4版に！
新種や新たな外来種、汽水魚などを追加してパワーアップ！

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、2025年7月18日、『山溪ハンディ図鑑 日本の淡水魚を第4版』を刊行いたしました。



2015年に発売し、淡水魚好きに愛されてきた『ハンディ図鑑 日本の淡水魚』。2019年には増補改訂版を刊行していましたが、さらにバージョンアップして第4版になりました！

これまでの美しい写真や詳細な解説といった特徴はそのままに、最新の情報にアップデート。ミナミスナヤツメやシーサーハゼなど近年記載された新種、テッポウウオやニューギニアウナギなど生息範囲の拡大により日本でも確認されるようになった種、シルバーアロワナやロングイヤーサンフィッシュなど新たに定着が確認された国外外来種、アカエイやサッパ、カスミアジといった汽水魚など24種を新たに追加しました。

330種以上の淡水魚を掲載した、日本の淡水魚図鑑の決定版です。

【第4版の特徴】
1.24種を新規掲載

スズキ目 サンフィッシュ科
ロングイヤーサンフィッシュ
Longspine Sunfish
学名 *Lepomis megalotis* (Rafinesque, 1820)

全長 (cm)	10~24
背鰭条数	X~XI, 10~12
臀鰭条数	III, 10~12
腹鰭条数	12~14
側線有孔条数	38~49
未判定外来生物	

白色で縁取られた
黒い点がある

頭部に青い
雲状斑がある

成魚 12.9cm

未成魚 9.7cm

体側に緑色と青色の
斑点が散在する

【形態】 体形はブルーギルに似るが、頭部に青い雲状斑がある。体側は緑色、背の斑点が散在する。背びれ、臀びれ、尾ふれに斑紋がある。えらぶた後端のフラップには本属魚類に特徴的な黒斑があり、その両縁は白色で縁取られるといった特徴がある。ブルーギルよりもやや小型。

【生態】 原産地では河川上流部や小川に生息するが、ブルーギルよりも汽水性が強いため、クローバー池といった呼称もある。ダム湖などでも繁殖する。原産地では昆虫類やそのほか無脊椎動物などを捕食。産卵期はブルーギルに類する。適水温は10~24℃程度。

【分布】 岐阜県本巣川水系揖斐川の徳山ダム貯水池で生息が確認されている。原産地は北米で、テキサス州・メキシコ北西部〜オンタリオ州（カナダ）にかけて生息する。

【特記事項】 本種はサンフィッシュ科でも特に美しい種とされ、観賞魚として国内でも流通していた経緯がある。現在は外来生物法により未判定外来生物に指定されており、輸入が規制されている。

(藤田朝寿)

356

スズキ目 サンフィッシュ科
パンキンシードサンフィッシュ
Pumpkinseed Sunfish
学名 *Lepomis gibbosus* (Linnaeus, 1758)

全長 (cm)	18~40
体長範囲	35~47
背鰭条数	III, 8~11
臀鰭条数	12~14
腹鰭条数	X~XI, 10~12
背骨骨数	28~29
未判定外来生物	

7cmほどの個体 おぼろげの種に似た体形からパンキンシードと呼ばれる。

【形態】 体形はブルーギルに似るが、頭部に青い雲状斑がある。えらぶた後端のフラップには本属魚類に特徴的な黒斑があり、その両縁は白色で縁取られ、かつオレンジ色の斑紋がある。体側に茶色に縁取られた斑紋が散在する。不對稱に斑紋があるといった特徴があり、ブルーギルとは容易に区別できる。

【生態】 原産地では小川や小堀類など止水域が多く、大きな湖では水生植物が繁る浅い池などで多く見られる。水生昆虫や小型の脊椎動物、魚類などを捕食する。産卵期はブルーギルに似て、水温が20℃ぐらいになると雌雄が水際の浅場に産卵床を作っていく。

【分布】 石川県のため池で生息が確認されている。原産地は北米で、五大湖周辺、セントローレンス川とミシシッピ川上流域。ただし、北米でも移入による広範囲に分布している。ヨーロッパにも移入され、問題になっている。

【特記事項】 本種もロングイヤーサンフィッシュと同じく未判定外来生物に指定されている。カナダではブルーギル類としてはブルーギルと並んで一般的な種とされる。

(藤田朝寿)

357

近年新種として記載されたミナミスナヤツメやシーサーハゼ、国外外来種として定着が確認されたシルバーアロワナやロングイヤーサンフィッシュ、生息域の拡大により日本でも確認されるようになったテッポウウオやニューギニアウナギに加え、アカエイやサツパといった汽水魚などを新規掲載しました。増補改訂版からは24種、初版からは約35種の新規掲載となりました。

2.最新の情報に更新

スズキ目 カジカ科
カマキリ (アユカケ)
Fourspine sculpin
学名 *Rhinogobius kazika* (Jordan and Sarks, 1906)

全長 (cm)	20~30
背鰭条数	VI~VII, 14~18
臀鰭条数	12~15
腹鰭条数	15~19
側線有孔条数	13~4
絶滅危惧I類 (VU)	

頭は大きく、丸みを帯びる

18.2cm 富山県産

腹びれに斑紋がない

体全体が幅広い

背鰭に3つの棘状斑

頭部斑はややゆるむ

青魚 10.6cm 三重県産

【形態】 頭は大きく丸く、目立った隆起はない。口の淡水カジカ類に比べて大型となり、口蓋骨に歯をもつ点を特徴とする。背鰭蓋には後方に向かう4棘があり、最上位の棘は強大で上方に強く曲がる。これでアユを引つけて食うという伝承があり、別名はこれに由来する。

【生態】 海で産まれ河川へ戻って成長する降河回遊魚。一般に砂礫質を好む河川の中流域に生息する。11~12月に川を下り、1~3月に河口域の岩礁の岩帯で繁殖する。産卵や受精には30%以上の海水が必要。オスは卵塊を保護する。ふ化した仔魚は翌年3~5月に稚魚となって川を遡る。各地で激減している。

【分布】 日本の固有種で、太平洋側は茨城県以南、日本海側は青森県以南の本州、四国、九州に分布する。

【特記事項】 最近の分子系統学的研究によれば、カマキリとヤマカキとは姉妹関係にあるという。ともに繁殖・初期発生に海水環境が必要であることも、このことを裏づける。

(藤田朝寿)

400

和名や学名の変更、国外・国内外来種の侵入や汽水魚の生息域北上などの分布変更、レッドリストへの掲載・種の保存法や外来生物法への指定など、掲載情報は2025年5月時点のものにアップデートいたしました。

3. 巻頭部分の刷新や新設コラムも

日本の淡水魚類学とはじめ

日本の淡水魚の特徴

淡水魚とは文字通り真次にすむ魚類のことである。島国である日本には、海産魚に食わなくとも多くの淡水魚がいる。その理由として、日本列島が南北に長いため冷水魚から熱帯魚まで多種多様な淡水魚がいる。かつて日本列島が大陸と陸続きだったころに、朝鮮半島やサハリン（樺太）を介しての沿岸など淡水魚がやってきました。黒潮が流れてくる南方起源の沿岸魚もいる。このように日本の淡水魚類相はルーツの多重構造によって特徴づけられる。

淡水魚と回遊

淡水魚のうち、多くの種が一生を河川や湖沼のような淡水域で終えるが、なかには繁殖や索餌を目的に海洋へ移動する種もある。反対に、水温や潮流の条件によっては、本来海産魚であるはずの種が淡水域に侵入することも珍しくない。そのような移動は回遊と呼ばれている。魚類が生活環境のなかで淡水域と海洋をどのように使い分けて回遊しているかによって分類整理したものが生態区分である。

純淡水魚 genuine freshwater fishes
塩分耐性の強弱にかかわらず、一生を淡水域で過ごす淡水魚。河川から水田地帯へ、湖沼から河川へ、河川内の上下流を移動する淡水域内での回遊のみ行われる。塩分耐性が強い種は淡水魚のロイヤリティ、ドジョウ科、ナマズ科、ギギ科、スズキ科のオヤシロコ、外來魚のタイワンドジョウ科、キナボリ科、サンショウ科のオオクチバス・コクチバス・ブルーギル。塩分耐性が強い二次性淡水魚のメダカ科やカワスズメ科などがこのグループに該当する。

通し回遊魚 diadromous fishes
生活環境の大部分を淡水域と海洋の間に往復する魚類。繁殖や発育・成長などの目的に応じて4つのパターンに分けられる。

① 遡河性回遊魚 anadromous fishes
淡水域で繁殖し、発育・成長のため生

活環境の長い期間を海洋で過ごす魚類。カワサギ、チヨウサメ、ササノマズ、キヌウリ、シマサメ、ヒメシロイサナなど。

② 降河性回遊魚 catadromous fishes
海洋で繁殖し、発育・成長のため生活環境の長い期間を淡水域で過ごす魚類。繁殖場が沿岸性のヤマノカミ、遠洋性のエボシウナギなど。

③ 淡水性両側回遊魚 freshwater amphidromous fishes
淡水域で繁殖し、生活環境の短い期間だけ海洋で過ごす。発育・成長のため再び淡水域に戻る魚類。アユ、各種シロボリ類、ウツミカサガエなど。

④ 海水性両側回遊魚 marine amphidromous fishes
海洋で繁殖し、生活環境の短い期間だけ淡水域で過ごす。発育・成長のため再び海洋に戻る魚類。ボラ、スズキ、クロダシなど。

通し回遊の4つの型 (McDowall, 1968を改定)

河川 → 海洋

孵化 → 産卵 → 成長 → 産卵

遡河性回遊 (アユ)

産卵 → 成長 → 産卵

降河性回遊 (ニホンウナギ)

産卵 → 成長 → 産卵

淡水性両側回遊 (アユ)

産卵 → 成長 → 産卵

海水性両側回遊 (ボラ)

産卵 → 成長 → 産卵

日本列島における淡水魚類相の生物地理区分

日本列島の淡水魚類相

日本列島は大陸に隔離されたため、生物地理学的には旧北区に分類される。そのため大陸にルーツを持つ淡水魚では、北はシベリア系がサハリン経由で、南は中国系が朝鮮半島経由でそれぞれ時代を遡って日本列島に侵入している(図1)。

シベリア系と中国系の境界線は、かつては津軽海峡を隔てるラサクシ種と見られてきたが、現在ではより北側に位置する石狩湾地帯(黒松内帯)であると見られている。本邦以南の中国系は、フォッサマグナによりおおむね東西に二分されている。東側の淡水魚類相は西側に比べて貧弱ではあるが、構成する魚種の固有度は高い。東北地方は奥羽山脈により東西に分断されているため、太平洋側と日本海側の魚類相は相互に異なっている。東側はシベリア系・アカヒレシラカブの分布が見られるように関東地方とのつながりが強く、西側はシマサメ・ウツミカサガエ・トミヨ属淡水魚の分布に見られるように北陸地方や山陰地方との関連性が認められる。一方、フォッサマグナの西側では、濃尾平野・琵琶湖・淀川水系・高瀬川内海をつなぐ豊かな淡水魚類相からなるベタ地帯が見られる。有明海周辺では、ヒメシロイサナ・ボラのように入来種との関係が深い魚種が淡水・海水を問わず分布している。

図1 日本のコイ科魚類のルーツと分散経路
シベリア系と中国系の2つのルーツがある

これまで掲載してきたコラムのうち、日本の淡水魚を知るうえで重要なものは再編し、新規解説を追加したうえで、「日本の淡水魚こととはじめ」として巻頭部分にまとめました。また、淡水魚好きであれば興味をもつ5つのコラムが新設。これまで以上に、日本の淡水魚に詳しくなることができます。

■『ハンディ図鑑 日本の淡水魚』のこれまで

- 2015年12月：初版刊行。約300種の淡水魚を掲載した図鑑として人気を博す
- 2019年9月：増補改訂版刊行。17種が新規掲載され、掲載種は約315種に
- 2023年9月：増補改訂版の解説や分布などの情報を更新し、第2版に
- 2025年7月：第4版刊行。24種を新規掲載し、掲載種は約335種に

【著者プロフィール】

■監修

細谷和海(ほそや・かずみ)

1951年東京都生まれ。京都大学大学院農学研究科修了。農学博士。近畿大学名誉教授、環境省絶滅のおそれのある汽水・淡水魚選定委員会座長。専門は魚類学および保全生物学。

■写真

内山りゆう(うちやま・りゆう)

1962年東京生まれ。東海大学海洋学部水産学科卒業。“水”に関わる生き物とその環境の撮影をライフワークにしている。特に淡水にこだわり、精力的に作品を発表する。

■解説

藤田朝彦(ふじた・ともひこ)

1978年兵庫県生まれ。近畿大学大学院農学研究科修了。農学博士。環境省関東地方環境事務所野生生物課課長補佐。専門は魚類系統分類学、保全生態学および保全分類学。

武内啓明(たけうち・ひろあき)

1984年三重県生まれ。東海大学海洋学部水産学科卒業。近畿大学大学院農学研究科修了。農学博士。専門は魚類系統分類学、漁業資源学。

川瀬成吾(かわせ・せいご)

1987年滋賀県生まれ。近畿大学大学院農学研究科修了。農学博士。現在、滋賀県立琵琶湖博物館主任学芸員。関西自然保護機構運営・編集委員。専門は魚類系統分類学および保全分類学。

井藤大樹(いとう・たいき)

第4版以降、新規解説と武内氏担当部分の確認を担当。1988年香川県生まれ。近畿大学大学院農学研究科修了。農学博士。現在、徳島県立博物館主任。日本魚類学会編集委員。専門は魚類系統分類学、比較形態学。

【商品詳細】

書名:『山溪ハンディ図鑑 日本の淡水魚 第4版』

監修:細谷和海 写真:内山りゅう 解説:藤田朝彦・川瀬成吾・井藤大樹

定価:4,620円(本体4,200円+税10%)

発売日:2025年7月18日

仕様:4C+1C・A5変形判 584ページ

<https://www.yamakei.co.jp/products/2825070460.html>

【山と溪谷社】 <https://www.yamakei.co.jp/>

1930年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。

さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス(本社:東京都千代田区、代表取締役:松本大輔、証券コード:東証スタンダード市場9479)を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。

さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社 担当:平野

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング

TEL03-6744-1900 E-mail: info@yamakei.co.jp

<https://www.yamakei.co.jp/>